２０２６年度　１学年通信

に じ い ろ

甲府東高等学校
2026.10.23(金)
第8号

「学年通信」は、生徒の皆さんが読み終わった後、必ず保護者の方に渡してください

「２年後を見据えて」

１学年主任　小澤 春美

朝晩が涼しくなり、過ごしやすい季節となりました。秋は、私たち教職員にとって、毎年恒例の３年生を対象とした面接・小論文指導の季節です。生徒が書いてきた小論文を添削したり、面接練習を行ったりしながら、全職員で推薦入試や総合型選抜などの受験を控えた生徒たちの指導にあたっています。

３年生と対話をしていて改めて感じるのは、１年生のうちから自分をアピールできるものを持つことの大切さです。部活動やボランティア活動、生徒会活動、課外活動、資格試験、職業体験などの経験を通して、自分が何を考え、どのように行動し、どんな力を身につけたのかを説明できることが重要です。また、その経験や身につけた力を大学での学びや将来の仕事にどのように生かせるのかも問われます。授業の予習や復習だけでも忙しい毎日かもしれませんが、興味のある活動にはぜひ積極的に参加してみてください。そこで得た経験や学びは、きっと皆さんの強みになるはずです。

また、学校推薦型選抜での受験を少しでも考えているのであれば、欠席をしないことや学校のルールを守ることも欠かせません。最近は、服装の乱れやルール違反が気になります。制服の着こなしは適切でしょうか。１０分休みにスマートフォンを使用していませんか。（１０分休みは、次の授業の準備やお手洗いを済ませるための時間です。）

先生方から指導を受ける前に、自分で気づいて正せるとよいですね。たとえ注意を受けた場合でも、素直に受け止め、すぐに改善する姿勢を大切にしてください。誠実さや素直さは、どのような受験方式であっても、また将来どのような進路に進んだとしても求められる大切な資質です。

今のうちからできることを見つけ、さまざまな経験を積み重ねていきましょう。そして２年後、自信を持って受験に臨める自分になっていてほしいと思います。さて、皆さんは何から始めますか。

【１１月の主な行事予定】

11月２日（月）学校創立50周年記念行事（学校創立記念日・ＹＣＣ県民文化ホール）
４日（水）～10日（火）三者懇談（４･５日は５分短縮、６･９･10日は午後授業カット）
４日（水）第２回バイク免許取得希望者説明会（昼）
５日（木）芸文祭グランドステージ･パレード
６日（金）▲上カセット
10日（火）バイク安全運転講習会（午後・湯村）
11日（水）登校時マナーアップ運動　第３回定期試験時間割発表･学習強化週間
18日（水）～25日（水）第３回定期試験
20日（金）県民の日（生徒休業日）　電気設備点検（午前）※停電
25日（水）④クリーンキャンペーン
26日（木）成績処理日（生徒家庭学習日）





【１学年リレー通信】

「百聞は一見に如かず」

１・２組 副担任　平川　久

「あなたの趣味は何ですか？」と問われると、まことに定番過ぎてお恥ずかしい限りであるが、「映画鑑賞と旅行です」と若い頃から答え続けている。前者は今でも続いているが、後者は新型コロナ禍を機に、胸を張って答えることはできなくなっているのが実情だ。映画鑑賞にしても、以前は毎月もしくは２か月に１回くらいは映画館に行き、大きなスクリーンで映画を楽しんでいたものだが、２０２０年の騒ぎの後は人込みに行くのは極力避け、また「〇〇〇〇プライム」というようなものを妻が我が家のリビングに取り入れたので、ホームシアターでの鑑賞が専らになってしまった。

２０２０年から数年に渡り全世界を恐怖と不安の闇へと突き落とした新型コロナウイルスによるパンデミック。日本中の国民が楽しみにしていたオリンピックは「無観客」での開催となり、音楽や演劇などのエンターテインメントも軒並み中止またはオンラインでの実施となった。いよいよこの世から「娯楽」なるものは壊滅するのかしら、と怯えていたことをよく覚えている。国内旅行も、ましてや海外旅行などは当然のことながらほとんどがキャンセルになり、上記したように「趣味は旅行です」と答えていた者にとっては、まさに悪夢のような日々を過ごしていた。

そのような悶々とした時間が続いていた中で、何気なくつけたテレビ画面に映し出されていたのは、正にその時期を象徴するような内容の番組だった。ジャンルで言えば、「すてきな旅行をしてみませんか」という通販番組。ただし「不要不急」な外出は禁止されていたので、番組を見ている視聴者が実際に旅に出かけることはあり得ない。そうではなくて、簡単に言えば、「疑似体験旅行」のようなもの。たとえば、「沖縄旅行に行きましょう」ということになったら、実際に美ら海水族館や琉球村を訪れるのは、その旅行会社の現地添乗員である。その添乗員が自分のスマホを使いながら生中継し、水族館のエントランスから入り、いろいろな水槽を見ながら下へ下へと下りていき、そしてクライマックスのジンベイザメの水槽へと到着する。「旅行客」自身は全く疲れることなく、見るべきもの・見たいなあと思っていた物を自宅のスクリーン上で存分に満喫できる。また、正午近くになると、宅配業者（あるいはウーバー何とか）が自宅にやってきて、「お待たせしました。沖縄のソーキそばとゴーヤチャンプルです。温かいうちにどうぞ」と言って、食事を置いて去っていく。

時間はだいぶ遡るが、私は大学３年生の夏休みに、同じ大学の友達と一緒に１か月間、ヨーロッパを旅して周るという経験をした。費用は、塾の講師、ダスキンやセブンイレブンで働いたりして貯金してあったものをつかった。まずイギリスに行き、その後、オランダ、ベルギー、そしてフランスとそれぞれの国にだいたい１週間ずつ滞在し、多くの観光名所を見学した。テレビで見ていた宮殿や教会、教科書の中で目にしていた多くの絵画や彫刻作品、そしてその土地で地元の人々が食している御馳走に挑戦してみる・・・泊まろうと思っていたホテルが満室で、駅のベンチで友達と一緒に一晩過ごしたりとか、体調を崩し微熱が２・３日続いてしまったりとか、大変なこともたくさんあったが、それ以上に良い思い出をたくさん持って帰ることができた。

そのような状況の中、今でも強烈な印象として私の脳裏に残っているのは、変な話だがその一連の旅の最終日、すなわち３０日目、日本に帰国した日に目にした光景である。成田空港の到着ロビーに到着し、成田から京成電鉄スカイライナーで日暮里駅に着き、電車からホームに降りた瞬間の「違和感」、すなわち、駅にいる人のほぼ１００％が黒色の髪をしているという光景に、それまで３０日間の自分自身の内面の変化を強く意識させられたのである。自分の周りにいる人々は、金髪もいれば茶髪もいる、彫りの深い顔の人もいれば、そうでない人もいる。一つの色だけでなく、いろいろな色が街中にあふれている、そういう中に自分も存在しているんだ、という気持ちにすっかりなっていた。

「百聞は一見に如かず」という。手元の辞書には、「百回聞くより一回見るほうがよくわかる」、「何度繰り返し聞いても、一度実際に見ることに及ばない」と書いてある。その「一見」というのは、カメラとスクリーンを通したものでも同じことなのか？「百見」は「一触」に如かず。実際に現場に行き、その場の匂いを嗅ぎ、その物自体に可能ならば触れてみる。そのような体験こそが本当に大切なものになるのだと思う。